

只見町番匠に継承される巻物と伝統住宅の研究 ～只見伝統住宅の研究と活用デザイン提案～

A2201434 船木美沙

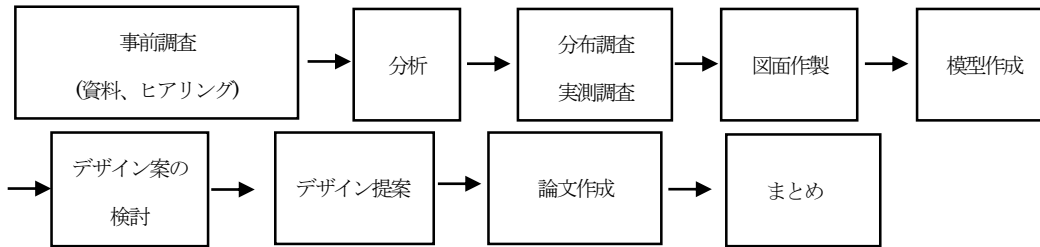
研究の背景

只見町では古より大工のことを番匠(ばんじょう)と呼んでいる。只見町の職人は棟梁から一人前の証として、代々巻物を受け継いでいる。巻物を持っていなければ一人前と認められず、巻物の有無で仕事が得られるかどうかの判断基準にもなっていた。文献調査では番匠の巻物には儀礼等の方法が記されているとのことだが、実際に元大工の方にお話を伺ったところ、現在も巻物を継承しているが、伝統工法は現在まで継承されず、途切れてしまったという。しかし、只見特有の「まがりや」は今でも現存している。巻物については、茅葺き職人のあいだでも継承されており、やはり只見特有の慣習ということだった。現在は番匠の後継者不足が問題となっている。さらに少子高齢化、人口減少により後継者が漸絶してしまわないかよりいっそう心配されている。本研究では巻物の内容を含め、只見町の特徴的な「まがりや」を研究し、軸組み模型の作成とまがりやを元にした活用デザイン提案を行う。

研究の目的

現在只見町にいる大工や工務店を対象にヒアリング調査をし、代々伝わってきた「まがりや」の工法等を、実測調査と軸組み模型を作成することで理解を深め、屋根や軒に大量の積雪に耐える工夫等を解明する。この工法等についての調査結果をもとに、只見町における民家の活用デザインを提案を行い、伝統工法の継承と住みよい環境づくりを目的とする。

研究のプロセス



調査方法

- ・ヒアリング調査(大工、教育委員会、元只見町教育委員会職員新國勇氏)
- ・文献調査(只見町史、巻物調査報告書、石伏地区・・・等々)
- ・町内にある厩中門造りのプロット調査
- ・只見町黒谷船木家住宅 実測調査



研究成果

○番匠巻物について

只見町には職人が親方から一人前の証として伝授される職人巻物がある。職人巻物には、小笠原流礼法・鉄砲打ち・番匠・元山・屋根葺職人・伯楽・桶職人・鉾山師とさまざまな職種のものがある。なかでも番匠巻物については現在でも継承されている。この巻物の文化は新潟の越後大工から伝わったとされている。只見町における番匠巻物は、最も古いもので17世紀中期のもので、大工起源譚、道具考、吉凶、着工、柱立て、上棟式等の儀礼次第が主であり、年代とともに儀礼次第に特化された記述になっていく傾向にある。一方、仕口や組手など建築技術的な知識は「見て盗む」ものとされ一切記されていない。巻物には人には見せず、次第に疑文書としての傾向が強くなっていった。



大工技術を具体的に伝える記述はないが、どこの棟梁から誰に伝授されたかという具体的な記述があり、それによって今回実測調査と軸組み模型の作成を行っている民家が、越後大工の棟梁について修行し、只見で技術と巻物を普及させた只見町小針村の大工であることが明らかとなった。また、軒先の納まり(三角形のせがい)を広めた可能性があることも、現存する布沢の民家で同じ納まりがあることが確認でき、明らかとなった。(小針村はかつて只見町東部にあった集落で、布沢付近ではないかと推測できる。)

○只見町の厩中門造りについて

只見町に多く残されている民家の多くが厩中門造りである。町内では一般的に、「まがりや」とよんでいる。「まがりや」と「厩中門造り」は、ともに母屋からL字型に突出した厩の部分を持つ民家のことで、そこに通路があるものを「まがりや」と区別して「厩中門造り」と呼んでいる。厩を屋内に設けるのは、農耕に必要な不可欠だった馬を少しでも寒さから守ろうとする工夫である。厩中門造りのプロット調査を行った結果、現在、町内に約120戸あることが確認できた。只見町の屋根葺き職人は有名で、関東に出稼ぎに行っていたことから「関東葺き」と呼ばれていた。

只見町の「まがりや」の特徴

- ・軒までの高さが高く、屋根が塊状に切りあがった「兜屋根」が多い。
- ・切りあがった部分に窓が設けられていて、積雪時に入出口として使用できる。
- ・南会津町の前沢集落と比較すると、屋根の茅が厚く、軒の出し方に特徴がある。
- ・只見町「厩中門造り」の軒先の「せがい」は、内部で三角形の天秤構造になっており、積雪に耐える工夫をしていることが今回の調査で明らかになった。
- ・只見町の民家には、外部に「かまぼた(川端)」、「ミンジャボリ」という生活水路が敷設されていて、室内の台所に相当するところに「ミンジャ」と呼ばれる水路から引いた水場があり、中水利用をしていたと考えられる。
- ・只見町「厩中門造り」の技術は、現在の新潟県柏崎市近郊から来ていた越後大工に由来すると考えられる。江戸後期頃の記録では只見町の大工の数が極めて少なく、新潟、茨城から大工が出稼ぎで来ており、大工仕事で使用していた滞り場所もあったという記録が残っている。また、番匠巻物の棟梁氏名の記述にも出身地としての記載がある。



只見町布沢地区



布沢地区 小林家



只見町黒谷地区、長浜地区

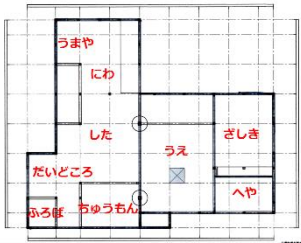


長浜地区 長谷部家

○只見町黒谷船木家住宅

只見町に現存する厩中門造りの住宅を実測した。

- ・住所：福島県南会津郡只見町黒谷字白沢
- ・調査日時：2015年10月11日、12日、11月11日
- ・建物上棟日：大正4年(1915)11月8日

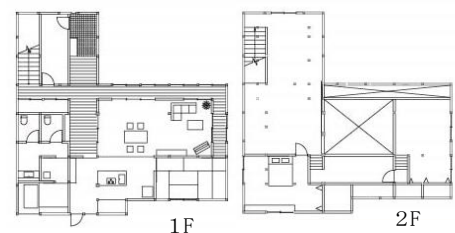


○只見町黒谷船木家リノベーション提案

〈コンセプト〉

対象は小さい子どものいる世帯で、高齢化の進む只見町に若い世帯に住んでもらうことを想定する。昔ながらの厩中門造りの住宅は、冬が寒く、そのせいで体調を崩すことも多かったという話を聞いた。そのため断熱を工夫し、LCCM(Life Cycle Carbon Minus)住宅の考えをもとにリノベーション提案を行う。

リノベーション前の民家の特長を生かした提案を行う。二階に設けられた窓の活用、養蚕業が盛んだった頃の蚕棚を元にした空間作り、換気口として利用されていた開口部の活用等、以前の特長を生かしながら、よりよい空間作りを提案する。



考察

本研究を通して、只見町に代々受け継がれてきた巻物や、住宅のルーツ等を知ることができた。さらに自ら厩中門造りの住宅を実測した結果、たくさんの発見があり、充実した研究となった。只見町の厩中門造りの住宅は現在、世帯数の減少や老朽化により、減少、或いは空き家となっている。只見町にはまた解き明かされていない古文書等も数多く存在し、課題も多い。今回のような調査を継続していくことで更なる発見と解決策を見出せる可能性があると思われ、本研究を通して感じた。